いのちと地域を守る

家具は倒れ、室内に物が散乱…助け合い復旧

近所関係 大切さ実感

3.11そのとき――マンション管理士・畑中泰治さん（67）

家具や棚が倒れ、室内に物が散乱した畑中さんの自宅＝2011年3月13日

安全な場所を確保

震災発生当時は、9階にある自宅のリビングでテーブルに座り、仕事をしていました。テレビで緊急地震速報が流れ、間もなく部屋全体が大きく揺れ始めました。

「この揺れはまずい」と思い、すぐに近くのソファ固辺に向かいました。家具が倒れても、下敷きにならない安全な場所として、半径1・5㍍ほどの空間を確保していたからです。

揺れが収まってから周囲を見回すと、4LDKの部屋の中は、どこも散乱していました。ダイニングを覗くと、冷蔵庫の扉からは食材や調味料類が飛び出していました。果実酒を漬けていたガラス瓶も砕け散っていました。箱に入れてしまっていた年賀状の束、電話機や電話、ペン立てにはれていません。片付けの前に、靴を探しました。リビングからは、めちゃくちゃでした。

木製の本棚は、倒れた衝撃で本体が壊れていました。落ちた数百冊の本の上には植木鉢の破片と、岩手・宮城内陸地震では倒れなかった背の低い家具も倒れています。1㍍50㌢ほどの収納スペースは引き出しが飛び出し、中の着物などが室内に散乱していました。

とてもはじには歩けません。片付けの前に、靴を探しました。リビングから玄関に続く廊下も散乱した物であふれていたので、慎重に足の踏み場を選んで玄関に向かいました。

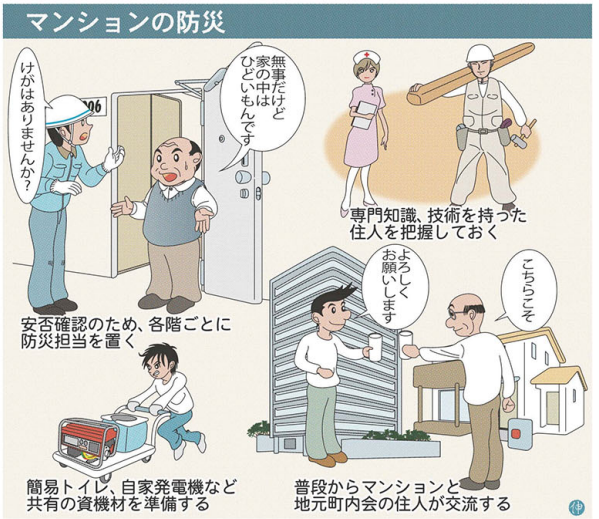
折れたつっかい棒

マンション管理の専門家として震災前、何度も防災セミナーを開いてきました。今回の地震は揺れが大きい分、防止のフィルムを張ったり、扉に留め金を付けておけばよかったと思いました。セミナーで紹介してきた対策が、どこまで役に立ったのか…。

私もさまざまな対策を実践していました。高さ2㍍のダイニングボードの転倒を防ぐため、天井との間につっかい棒を取り付けました。ガラス扉に飛散防止のフィルムを張ったり、扉に留め金を付けておけばよかったと思いました。

つっかい棒は、揺れで折れてしまったようです。ダイニングボードはテーブルの上に倒れ、中の食器は全て割れてしまいました。

震災の体験で思ったことは、家具の転倒防止策を取っていたが、役に立たなかったことです。部屋の片付けなどをして生活を取り戻す間、近隣の住民が助け合い、日ごろから住民同士の付き合いを深めておくことが大切だということを、あらためて感じました。



地元町内会とつながりを

減災・復興支援機構理事長　木村 拓郎さん

マンションは災害時、住民にとっての避難所にもなる。防災・減災対策のキーワードとして「自助」を基本とした「自立と連携」を勧めたい。

住居はあくまでも自己がマンション内で生活することを目標にし、マンションの災害対策本部のほかに、フロアごとに防災担当者を置き、安否確認や情報の伝達をしてはどうか。

フロアごとに事情が異なる場合もある。特にエレベーターが止まると高層階の住民は大変だ。住民同士が普段から交流を深め、互いに支援してほしい。

連携に関し、地元町内会とのつながりをつくることも不可欠だ。今後は高齢化が進み、マンション住民だけで災害時に動くことは難しくなる。その際、地域の助けが必要になるし、逆に地域を助ける局面も出てくる。

たくさんの人が住んでいるのだから、さまざまな知識や技術を持っている人がいるはずだ。災害に専門分野で力を発揮してもらうように、事前にリストを作成することもお勧めする。

さまざまな対策は、できることから人員や資金で始めてもらいたい。一気に全て実行するのは難しいので、年次計画を立て、段階的に意見に進めてほしい。

■むすび塾に参加して――仙台・長町

【防災対策について】組合で防災手帳を作る計画があるが、配るだけでは役に立たない。説明する機会を設けて一人一人が手帳を使いこなせるようにするなど、防災教育や啓発が必要だ。

＝組合防災委員・八重樫順一さん（62）

【震災を経験して】妻はさまざまな災害に備え、1カ月間分の食料や物品を備蓄していた。地震で部屋がめちゃくちゃになり、一時、ありがが分からなかったが、何もないより随分役に立った。

＝マンション管理士・組合修繕委員長・畑中泰治さん（67）

【震災時の様子】震災前から、平時の行動と自助が大切だと考え、最低3日分の食料と水、役立ちそうな物を備蓄していた。丈夫な米袋は、割れた陶器やガラスの破片を片付けるのに役立った。

＝沢村貴代子さん（62）

【震災時の様子】9階の自宅では家具の転倒防止策を取っていたが、役に立たなかった。ためておいた風呂場の水も、揺れが大きすぎて風呂おけが飛びすれ、こぼれてしまった。テレビの下に敷いたジェル状のパッドだけは唯一、効果があった。

＝組合理事長・鈴木久志さん（60）

【参加して】同じマンションに住みながら、住人同士でこんなに震災のことを話し合う機会はなかった。今後の防災や支え合いにとても参考になった。

＝組合修繕委員・尾崎正隆さん（68）

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

第12回「むすび塾」は31日、宮城県七ケ浜町花渕浜地区で開催します。